

古文総合
練習問題

〈基礎から始める古文〉



目次

練習問題 1	活用判定 (易)	3	練習問題 9	(係助詞)	35
練習問題 2	活用判定 (易)	7	練習問題 10	(格助詞・接続助詞)	37
練習問題 3	活用判定 (難)	11	練習問題 11	助詞総合演習	39
練習問題 4	用言総合	15	練習問題 12		44
練習問題 5	(るゝしむ)	25	練習問題 13		47
練習問題 6	(ずゝまほし)	27	練習問題 (付属語予備)		51
練習問題 7	(きゝり)	29	練習問題 14		72
練習問題 8	助動詞総まとめ	31	練習問題 15	(敬語総合)	75

練習問題 1

〔A〕次の説明の「 〱 」に当てはまる語を答えよ。

1 独立して働く、意味を持ったことばの最小単位を、「 〱 」という。

2 体言を含む文節を修飾する語を、「 〱 」語という。

3 自立語で活用し単独で述語になる語を、「 〱 」言という。

4 付属語で活用する語を、「 〱 」という。

5 付属語で活用しない語を、「 〱 」という。

〔B〕次の語を現代仮名遣いに直して平仮名で書け。

6 つかはす (遣はす)

1

2

3

4

5

6

7 せうと（兄人）

8 咲かなむ

9 ゆゑ（故）

1 0 あふせ（逢瀬）

〔C〕 次の文を「／」で文節に分けよ。

1 1 ある僧、人のもとへ行きけり。（宇治拾遺物語）

1 1 〱

1 2 丹波たんばに出雲いづもといふ所あり。（徒然草・二三六）

1 2 〱

7 〱

8 〱

9 〱

1 0 〱

〱

〱

〱

〱

〱

〱

[D] 次の文を「/」で単語に分けよ。

1 3 ほのかにうち光りて行くもをかし。(枕草子・一)

1 4 1 3 屋の内は暗き所なく光満ちたり。(竹取物語)

1 5 1 4 雨など降るもをかし。(枕草子・一)

1 5 1 4

解答

- 1 (単語) 2 (連体修飾) 3 (用) 4 (助動詞) 5 (助詞) 6 (つかわす) 7 (しようど) 8 (さかなん) 9 (ゆえ) 10 (おうせ)
- 11 (ある僧 / 人の / もとへ / 行きけり。)
- 12 (丹波に / 出雲と / いふ所 / あり。)
- 13 (ほのかに / うち光り / て / 行く / も / をかし。)
- 14 (屋 / の / 内 / は / 暗き / 所 / なく / 光 / 満ち / たり。)
- 15 (雨 / など / 降る / も / をかし。)

練習問題 2 活用判定 (易)

〔A〕 次の傍線部の語の活用の行と種類を答えよ。

- 1 人怖^おぢて、あへてそのわたりに行か^ずず。(宇治拾遺物語) 1 ()
- 2 神へ参^らるこそ本意^{ほんい}なれと思ひて、山までは見^みず。(徒然草・五二) 2 ()
- 3 立ち帰^かる音^ねす。(蜻蛉日記) 3 ()
- 4 その前後に死^しぬる者多く、(方丈記) 4 ()
- 5 おのが身は、この国の人にもあ^あらず。(竹取物語) 5 ()

[B] 次の傍線部の活用之行と種類、基本形、活用形を答えよ

6 若き女三人うち群れて、内様へ行きけり。みたり うちさま (今昔物語集)

6 〔 〕

7 添ひて二三町ばかり行けども、(宇治拾遺物語)

7 〔 〕

8 烽火を上ぐれども、(平家物語・烽火之沙汰)ほうくわ ほうくわの さた

8 〔 〕

9 尻をほうと蹴たれば、失せぬるなり。(宇治拾遺物語)

9 〔 〕

10 石を、はかなき筏いかだに載せて率みて来れど沈まず。(栄花物語)

10 〔 〕

1 1 打ち割らんとすれど、たやすく割れず、
（徒然草・五三）

1 1
（

1 2 京にのぼり、宮仕へをもせよ。
（大和物語）

1 2
（

1 3 つひにはその毒の故に死ぬれども、
（宇治拾遺物語）

1 3
（

1 4 祈るしるしありて、風波立たず。
（土佐日記）

1 4
（

解答

- 1 (カ行四段活用) 2 (マ行上一段活用) 3 (サ行変格活用) 4 (ナ行変格活用) 5 (ラ行変格活用) 6 (カ行四段活用・行く・連用形) 7 (カ行四段活用・行く・已然形) 8 (ガ行下二段活用・上ぐ・已然形) 9 (カ行下一段活用・蹴る・連用形) 10 (カ行変格活用・来・已然形) 11 (サ行変格活用・す・已然形) 12 (サ行変格活用・す・命令形) 13 (ナ行変格活用・死ぬ・已然形) 14 (ラ行変格活用・あり・連用形) 15 (ラ行変格活用・あり・已然形)

練習問題 3 活用判定(難)

次の例文の動詞をすべて文法的に説明せよ。また、活用表を完成させよ。

- ① 八月十五日ばかりの月に出で居て、かぐや姫いといたく泣き給ふ。
- ② 富士の峰かすかに見えて、上野・谷中の梢、またいつかはと心細し。
- ③ 老いては子に従へ。
- ④ なんとてかかる憂き目をば見るべき。
- ⑤ 「いづら（||どこへ行った?）、猫は。こち率て来。

⑥ 世にふりぬることをも、おのずから(〓中にはひよつとして)聞きもらすあたり(〓人)もあれば、

⑦ 白露の色はひとつを(〓一つなのに) いかにして(〓どうして) 秋の木の葉をちぢに染むらむ

⑧ 夕べに寝ねて、朝におく。

⑨ 「観音火杭変成池はいかに」と札を書きて、大門の前に立つ。

解答

- ① 「出で」ダ行下二連用・「居」ワ行上二連用・「泣き」カ行四段連用・「給ふ」ハ行四段終止 ② 「見え」ヤ行下二・連用
③ 「老い」ヤ行上二連用・「従へ」ハ行四段命令 ④ 「かかる」ラ変連体・「見る」マ行上二終止 ⑤ 「率」ワ行上二連用・「来」カ変命令
⑥ 「ふり」ラ行上二連用(「古くなる」の意)・「聞きもらす」サ行四段連体・「あれ」ラ変已然 ⑦ 「染む」マ行下二終止
⑧ 「寝ね」ナ行下二連用・「おく」カ行上二終止 ⑨ 「書き」カ行四段連用・「立つ」タ行下二終止

複合動詞は、

- ③ ② ①

「―し、そして―する」と解せる時は、別々の二語
 「―し、そして―する」と解せないときは、一語の複合動詞
 本動詞+補助動詞の時は、別々

飽く	恨む	足る	離る	借る	耐ふ	閉づ	基本形
飽	恨	足	離	借	耐	閉	語幹
か	み	ら	れ	ら	へ	ぢ	未然形
き	み	り	れ	り	へ	ぢ	連用形
く	む	る	る	る	ふ	づ	終止形
くる	むる	る	るる	る	ふる	づる	連体形
くれ	むれ	れ	るれ	れ	ふれ	づれ	已然形
きよ	みよ	れ	れよ	れ	へよ	ぢよ	命令形

練習問題 4 用言総合

〔A〕傍線部の動詞の活用の種類として正しいものを選び。

1 世界のをのこ、あてなるもいやしきも、いかでこのかぐや姫を得てしがな、見てしがなと、おとに聞き、めでて惑ふ。〈竹取物語〉

- ①下二段 ②四段 ③上二段 ④下一段

1 ()

2 身をも人をも頼まざれば、是なるときは喜び、非なるときは恨みず。〈徒然草〉

- ①変格活用 ②上二段活用 ③四段活用 ④上二段活用

2 ()

3 石山にをととしまうでたりしに、〈蜻蛉日記〉

- ①上二段活用 ②下二段活用 ③上二段活用 ④下一段活用 ⑤変格活用 ⑥四段活用

3 ()

用

4 いぬる五日の夜の夢に、御そでに月と日とを受けたまひて、〈蜻蛉日記〉

- ①変格活用
- ②下二段活用
- ③四段活用
- ④上一段活用
- ⑤上二段活用
- ⑥下一段活用

用

5 おとどかどどといふ文字をふと書きつくれば、〈蜻蛉日記〉

- ①上二段活用
- ②下二段活用
- ③変格活用
- ④四段活用
- ⑤下一段活用
- ⑥上一段活用

用

6 この同じことの見ゆるなり。〈蜻蛉日記〉

- ①変格活用
- ②上二段活用
- ③下二段活用
- ④四段活用
- ⑤下一段活用
- ⑥上一段活用

用

7 しばしかためて、ひやうど射たり。〈平家物語〉

- ①ヤ行上一段活用
- ②ア行下一段活用
- ③ラ行変格活用
- ④ワ行上二段活用
- ⑤タ行下

二段活用

⑥ラ行四段活用

7
〔 〕

6
〔 〕

5
〔 〕

4
〔 〕

「B」次の問いに答えよ。

8 動詞「死ぬ」の活用を次の中から選べ。

- ①ラ変
- ②ナ変
- ③下二段
- ④四段
- ⑤下一段

9 活用の種類が他の三つと異なる動詞を含むものはどれか。

- ①着たりける
- ②みたる
- ③射けり
- ④見えず

「C」傍線部の活用形について、該当するものを選べ。

1 0 行く末も頼もしかるべきに、へとはずがたり

- ①連体形
- ②連用形
- ③已然形
- ④未然形
- ⑤命令形
- ⑥終止形

1 1 河となりて流るるかと思ひ、へとはずがたり

- ①連用形
- ②連体形
- ③命令形
- ④已然形
- ⑤終止形
- ⑥未然形

1 1
∧
∨

1 0
∧
∨

9
∧
∨

8
∧
∨

1 2 「心ちのわびしき」とて、〈建礼門院右京大夫集〉

- ①連用形 ②未然形 ③命令形 ④終止形 ⑤已然形 ⑥連体形

1 3 げにながらふる世のならひ、〈建礼門院右京大夫集〉

- ①連体形 ②終止形 ③命令形 ④連用形 ⑤未然形 ⑥已然形

〔D〕傍線部の各語をそれぞれ活用形によって二つに分類するとどのようなようになるか。その組み合わせと
してもつとも適当なものを選べ。

1 4 財宝は、^aなけれど、さすがに空倉はあまたありけり。

いか^bがは^bせんと思ふもかなしく、

仏僧を供養し奉ることも時にこそよれ、

空倉に入りて求めんとすれば、倉ごとにその戸つまりてあかず。

欲情のままに福を求めば、今生に求め得たる大利のなきのみにあらず、〈夢中間答集〉

- ① [a c d e] と [b] ② [a b d e] と [c] ③ [a c d] と [b e] ④ [a b e] と [c d] ⑤ [a d] と [b c e] ⑥ [a e] と [b c d]

[E] 傍線部の動詞の終止形を答えよ。

1 5 その器に足らず侍れば、〈十訓抄〉

1 4
〱

1 6 障子を引|き開|けおはして、〈十訓抄〉

1 5
〱

1 6
〱

[F] 形容詞「めでたし」を空欄に適切な形に活用させよ。

1 7 三輪・初瀬かけて詣でける帰さに、
「
」枝どもあまたに、〈兼好諸国物語〉

1 7
〱

〱

1 8 持たる枝を見れば、さしも「
」し紅葉の多く散り失せにけるを、〈兼好諸国物語〉

1 8
〱

〱

[G] 傍線部の動詞の終止形をひらがなで答えよ。

1 9 世の中に絶えて桜の咲かざらば春の心はのどけからまし〈土佐日記〉

2 0 千代経たる松にはあれどいにしへの声の寒さは変らざりけり〈土佐日記〉

[H] 傍線部の終止形（ひらがなで表記すること）と活用の種類を答えよ。

2 1 またうちとけて寝べき心地もせず。〈閑田文章〉

2 2 あはれ老いにけるかな。〈閑田文章〉

[I] 傍線部の動詞の活用の種類を答えよ。

2 3 巢には脚をのみ据ゑて立ち居たり。〈折々草〉

2 4 後は、少し怖ぢてや、我は巢の上なる枝にをりて、〈折々草〉

3 7 年もまだ幼うてさぶらふを、〈平家物語〉

3 7 〔

3 6 〔

解答

- 1 〔①〕
- 〔①〕 1 1 〔②〕
- 〔めでたかり〕 1 9 〔たゆ〕 2 0 〔ふ〕 2 1 〔ぬ ナ行下二段活用〕 1 5 〔足る〕 2 2 〔おゆ ヤ行上二段活用〕 1 7 〔めでたき〕 1 8 1 0
- 二段活用〕 2 4 〔ダ行上二段活用〕 2 5 〔ナ行上二段活用 連用形〕 2 9 〔ハ行四段活用 連用形〕 2 6 〔バ行下二段活用 連体形〕 2 7 〔ワ行下二段活用 連用形〕 2 8 〔ラ行変格活用 連用形〕 2 9 〔ハ行四段活用 連用形〕 2 6 〔バ行下二段活用 連体形〕 2 7 〔ラ行下二段活用 未然形〕 3 2 〔マ行下二段活用 連用形〕 3 3 〔覚え〕 3 4 〔覚ゆれ〕 3 5 〔覚ゆる〕 3 6 〔従ひ〕 3 7 〔幼く〕

練習問題 5 (るくしむ)

次の傍線部の訳を「」に合うように補って、現代語訳を完成せよ。

1 住みなれしふるさとかぎりなく思ひ出でらる。(更級日記)

(訳) 住み慣れた旧宅がこの上なく「」。

1 「

2 涙のこぼるるに目も見えず、ものも言はれず。(伊勢物語・六二)

(訳) 涙がこぼれるので目も見えず、ものも言う「」。

2 「

3 思ふ人の、人にほめらるるは、いみじうれしき。(枕草子・一三〇)

(訳) 思いを寄せる人が、人に「」のは、たいへんうれしいことよ。

3 「

4 源三位入道げんさんみとて、今年は七十五にぞなられける。(平家物語・穂ぬえ)

(訳) 源三位入道といって、今年は七十五歳に「」。

4 「

5 人をやりつつもとめさすれど、さらになし。(大和物語)

「

「

「

「

練習問題 6 (ずくまほし)

次の傍線部の訳を「」に合うように補って、現代語訳を完成せよ。

1 龍たつの頸くびの玉取り得ずは帰り来くな。(竹取物語)

(訳) 龍の首の玉を取ることが「」帰ってくるな。

1 「

2 飛鳥川あすかがはにあらねば、淵瀬ふちせさらに変はらざりけり。(土佐日記)

(訳) 飛鳥川ではないので、淵も瀬もまったく「」たのだなあ。

2 「

3 親子と見ず知らざらむよ。(うつほ物語)

(訳) 親子として会わず「」のだろうよ。

3 「

4 煩わづらはしき事になりなんぞ。(宇治拾遺物語)

(訳) 面倒なことにきつとなる「」。

4 「

5 ただ帰らむは、いとさうざうし。(堤中納言物語)

「

(訳) このまま 「 は、とてももの足りない。

5

「

」

解答

1 「できないならば」

2

「変わらなかった」

3

「知らない」

4

「だろう」

5

「帰るとしたらそれ」

練習問題 7 (きり)

1 塔たふを立て、供養くやうせしかば、天に生まれまれき。(沙石集)

(訳) 塔を立てて、供養したので、天に生まれ変わっ()。

1

(

)

2 かの女を捕らへて上げあつ下おろしつきうもん糺問す。(義経記)

(訳) その女を捕らえてすかし() 脅おどし() 問たいただす。

2

(

)

3 二日。なほ大湊おほみなとに泊とまれり。(土佐日記)

(訳) 二日。依然として大湊に停泊し()。

3

(

)

解答 1 (た) 2 (たりくたりして) 3 (ている)

練習問題 8 助動詞総まとめ

「A」次の傍線部の訳を「 」（ ）に合うように補って、現代語訳を完成せよ。

1 いかにしてもものを食はせん。く（古本説話集）

（訳） どうにかしてもものを食べ「 」（ ）よう。

2 やがてかけこもらましかば、口惜しからまし。し（徒然草・三二二）

（訳） すぐに鍵をかけて閉じこもつ「 」（ ）、残念だっただろうに。

3 はや舟出ふなでしてこの浦を去りね。し（源氏物語・明石）

（訳） 早く船出をしてこの浦を立ち去つ「 」（ ）。

4 人のもとに遣らむとしける文ふみあり。し（蜻蛉日記）

（訳） 人のもとに送ろ「 」（ ）とした手紙がある。

5 例の涙もとどめられず。れ（源氏物語・須磨）

1

（

）

2

（

）

3

（

）

4

（

）

(訳) いつものように涙も抑える「 」ない。

5 「

6 まことに、いかに昔恋しかりけむ。(無名草子)

(訳) 本当に、どんなに昔が恋しかつ「 」か。

6 「

7 手にうち入れて、家へ持ちて来ぬ。(竹取物語)

(訳) 手の中に入れて、家へ持って「 」。

7 「

8 楽の師の、心整へて、深き遺言せし琴なり。(うつほ物語)

(訳) 楽人が、心を正して、深い遺言を「 」琴である。

8 「

9 世の例にもなりぬべき御もてなしなり。(源氏物語・桐壺)

(訳) 世間の語りぐさにも「 」ご待遇である。

9 「

10 伊尹・兼通・兼家などが、言ひ催して、せさするならむ。(大鏡・師輔)

(訳) 伊尹・兼通・兼家などが、そそのかして、「 」。

「

「

「

「

「

1 1 水底みなそこの月の上より漕こぐ舟の棹さにさはるは桂かじなるらし (土佐日記)

(訳) 水底の月の上を漕いで行く船の棹に触れるのは「」。

1 1 「

1 2 衣着きぬぬ妻子なども、さながら内にありけり。 (宇治拾遺物語)

(訳) 服を「」妻子なども、みんな家の中にいた。

1 2 「

1 3 その道を知れる者は、やんごとなきものなり。 (徒然草・五一)

(訳) その道を知っている者は、すばらしい者「」。

1 3 「

1 4 はるかに見やられる心地して、あはれなり。 (紫式部日記)

(訳) 遠くまで見送ら「」感じがして、しみじみ感慨深い。

1 4 「

1 5 陳ちんを張りほじ持たつかしめて後、我その命つかさどを司つかさどらん。 (太平記)

「

「

「

「

「

(訳) 陣形をとり戈を「」てから、私はその命令をとりしきろう。

1 5 「

1 6 獣といへど虎、狼ならぬは住まざなり。(うつほ物語)

(訳) 獣というけれども虎や、「」は住まないそうだ。

1 6 「

1 7 討たれたらんは、なんの詮かあらんずるぞ。(平家物語・一二之懸)

(訳) 討たれてしまったとしたらそれは、何のかが「」か。

1 7 「

1 8 げにいとよき所なめり。汝が堂を建てよ。(大鏡・道長)

(訳) なるほどとも「」。おまえの寺を建てろ。

1 8 「

解答 1 「させ」 2 「たならば」 3 「てしまえ」 4 「う」 5 「ことができ」 6 「ただろう」 7 「来

た」 8 「した」 9 「きつとなるにちがいない」 10 「させるのであるだろう」 11 「桂であるらしい」 12 「着

ていない」 13 「である」 14 「ずにはいられない」 15 「持たせ」 16 「狼ではないもの」 17 「あるだろう」 18 「着

「よい場所であるようだ」 1 9 「わからないことはないだろう」 2 0 「詠ませなさる」

練習問題 9 (係助詞)

〔A〕次の傍線部の訳を「 」に合うように補って、現代語訳を完成せよ。

1 祭りのころは、なべて今めかしう見ゆるにやあらむ、あやしき小家の半部はじとみも、葵あゆひなどかざして、心地よげなり。(堤中納言物語)

(訳) 賀茂の祭りの頃は、総じて華やかに見えるので「 」、粗末な小さい家の半部も、葵などをかざって、気持ちよさそうである。

1 「 」

2 恋しくは形見にせよと我が背子が植わえし秋萩あきほ花咲きにけり(万葉集・二二一九)

(訳) 恋しい「 」、形見にしなさいと、私の夫が植えた秋萩は花が咲いたことよ。

2 「 」

3 心なしと見ゆる者も、よき一言ひとこと言ふものなり。(徒然草・一四二)

(訳) 情趣を解さないと思える者「 」、よい一言を言うものである。

3 「 」

4 中垣こそあれ、一つ家のやうなれば、望みて預かれるなり。(土佐日記)

(訳) 間の垣根はある「 」、一軒の家のものであるので、(自分から)望んで預かったので

ある。

5 雨もぞ降る。(徒然草・一〇四)

(訳) 雨が降る「」。

4

「

」

6 生きとし生けるもの、いづれか歌を詠まざりける。(古今集・仮名序)

(訳) あらゆる生きものは、「」。

5

「

」

7 異説を好むは、浅才せんざいの人の必ずある事なりとぞ。(徒然草・一一六)

(訳) 普通と違った考えを好むのは、浅学の人の必ずあることだと「」。

7

「

」

8 いかに関ひ捨てたることぐさも、皆いみじく聞こゆるにや。(徒然草・一四)

(訳) どんなに(無造作に)言い捨てた言葉でも、すべてすばらしく聞こえるので「」。

8

「

」

解答 1 「あろうか」 2 「ならば」 3 「でも」 4 「けれども」 5 「と困る」 6 「どれが歌を詠まないことか、いや詠まないものはいないよ」 7 「言う」 8 「あろうか」 9 「誰がいるだろうか、いやはいはしない」 10 「こそ」

練習問題 10 (格助詞・接続助詞)

〔A〕 次の傍線部の訳を「 」に合うように補って、現代語訳を完成せよ。

1 いかねば四條大納言のはめでたく、兼久かねひさがはわろかるべきぞ。(宇治拾遺物語)

(訳) どうして四條大納言のものはすばらしく、兼久「 」はよくないのだろうか。

1 「 」

2 いとやむごとなき際きはにはあらぬが、すぐれて時めきたまふありけり。(源氏物語・桐壺きりつぼ)

(訳) たいして高貴な身分ではない方「 」、こ格別ちやうべつに寵愛あいをお受けになる方がいた。

2 「 」

3 風の吹くことやまねば、岸の波立ち返る。(土佐日記)

(訳) 風「 」吹くことがやまないので、岸の波が寄せては返る。

3 「 」

4 人にも語らず、習はむとも思ひかけず。(更級日記)

(訳) 人「 」も話さず、習おうとも考えない。

4 「 」

5 七珍万宝しちちんまんぼうさながら灰燼くわいじんとなりにき。(方丈記)

(訳) あらゆる種類の珍しい宝がすっかり灰や燃えがら〔 〕なってしまった。

5 〔 〕

6 そこなりける岩に、指およびの血して書きつけける。(伊勢物語・二四)

(訳) そこにあった岩に、指の血〔 〕書きつけた。

6 〔 〕

7 送りに来つる人々これより皆かへりぬ。(更級日記)

(訳) 見送りに来た人々はここ〔 〕皆帰った。

7 〔 〕

8 滝口などして、(犬ヲ)追ひ遣はしつ。(枕草子・七)

(訳) 滝口の武士など〔 〕、(犬を)追放してしまった。

8 〔 〕

9 久しう見給はざりつるに、山の紅葉もみぢもめづらしうおぼゆ。(源氏物語・東屋)

(訳) しばらくご覧にならなかった〔 〕、山の紅葉も新鮮に思われる。

9 〔 〕

解答

- 1 〔 のもの 〕
- 2 〔 で 〕
- 3 〔 が 〕
- 4 〔 に 〕
- 5 〔 と 〕
- 6 〔 で 〕
- 7 〔 から 〕
- 8 〔 に命じ
- て 〕
- 9 〔 の 〕

練習問題 11 助詞総合演習

〔A〕 次の傍線部の訳を「 」に合うように補って、現代語訳を完成せよ。

1 (法成 寺デハ) 草木すらみな法を説くと聞こゆ。(栄花物語)

(訳) (法成寺では) 草木「 」みな仏法を説くように聞こえる。

1 「 」

2 月影ばかりぞ、八重葎にも障らずさし入りたる。(源氏物語・桐壺)

(訳) 月の光「 」が、幾重にも茂った草にも遮られず差し込んでいる。

2 「 」

3 昔、男、武蔵の国まで惑ひ歩きけり。(伊勢物語・一〇〇)

(訳) 昔、男が、武蔵の国「 」さまよい歩いた。

3 「 」

4 (鶯 ガ) かしがましきまでぞ鳴く。(枕草子・三九)

(訳) (鶯が) やかましい「 」鳴く。

4 「 」

5 若き人たちは、「なほことなりけり」など言ふ。(源氏物語・竹河)

(訳) 若い人たちは、「やはり格別であるなあ」 「 」言う。

6 ただ、波の白きのみぞ見ゆる。(土佐日記)

(訳) ただ、波の白いの 「 」が見える。

7 人の持ちたらんずる太刀千振取りて、重宝にせばや。(義経記)

(訳) 人が持っているような太刀を千本奪って、大事な宝にし 「 」。

8 暮れにだに、心静かにもがな。(うつほ物語)

(訳) せめて夕暮れ時だけでも、心静か 「 」。

9 今はかく馴れぬれば、何事なりとも隠しそ。(今昔物語集)

(訳) 今はこのように親しくなったので、どんなことであっても隠さ 「 」。

10 いといみじきことかな。(蜻蛉日記)

(訳) とても大変なことだ 〱 〱。

1 1
いつしかその日にならなむ。 (枕草子・三)

(訳) 早くその日になつ 〱 〱。

1 2
この歌、ある人のいはく、柿かきの本もとの人麻呂ひとまろが歌なり。(古今集・三三四)

(訳) この歌は、ある人 〱 〱 言うことには、柿本人麻呂の歌である。

1 3
三つ四つばかりの女君のいといとうつくしきぞおはしける。(栄花物語)

(訳) 三歳、四歳ほどの女君 〱 〱 非常にかわいらしい女君がいらつしやつた。

1 4
まことにかばかりのは見えざりつ。(枕草子・九八)

(訳) 本当にこれほど 〱 〱 は見られなかつた。

1 0
〱 〱

1 1
〱 〱

1 2
〱 〱

1 3
〱 〱

1 4
〱 〱

20

いかでこの人に、思ひ知りけりとも見えにしがな。(枕草子・二五二)

19

(訳) どうにかしてこの人に、よくわかったことよとも見られ

20

解答

- 1 「できえ」
- 2 「だけ」
- 3 「まで」
- 4 「ほど」
- 5 「などと」
- 6 「だけ」
- 7 「たいものだ」

- 8 「であればなあ」
- 9 「ないでくれ」
- 10 「なあ」
- 11 「てほしい」
- 12 「が」
- 13 「で」
- 14 「のもの」

- 15 「と」
- 16 「のに」
- 17 「てしまっ」
- 18 「と」
- 19 「過ぎすのがよいか」
- 20 「たい」

練習問題 12

次の短文を現代語訳せよ。(助動詞に注意すること。)

- ▼ 起きて見つ寝て見つ蚊帳の広さかな
- ▼ 起き上がってみたり、寝てみたり、蚊帳が広い(と感じられ、寂しさが身にしみることだ)なあ
- ▼ この川、飛鳥川にあらねば、淵瀬さらに変はらざりけり。
- ▼ この川は、飛鳥川ではないので、淵も瀬も決して変わらないことであるなあ
- ▼ 世の中に見えぬ皮衣のさまなれば、……
- ▼ 世の中で見かけない皮衣の様子なので、
- ▼ 「潮満ちぬ。風も吹きぬべし」
- ▼ 潮が満ちた。風もきつと吹くだろう
- ▼ 負けじ魂に怒りなば、せぬことども(＝ふつうならしないようなこと)もしてむ。
- ▼ 負けまい(とする)魂(気持ち)に怒り出したので、普通ならいようなことも気つとするだろう。
- ▼ うらうらに照れる春日にひばりあがり心悲しもひとりし思へば
- ▼ のどかに照っている春の日差しにひばりが飛ぶ。、悲しい気分になるなあ。一人で物思いにふけているので。
- ▼ 「化身してしまったかぐや姫に対して」「もとの形になり給ひね」
- ▼ もとのお姿におなりください。

- ▼ 思ひつつ寝ればや人の見えつらむ夢と知りせば覚めざらましを
思いながら眠りについたので、(あの人が)夢に現れたのだろうか。もし夢とわかっていたらなら(夢から)覚めなかったろうに。
- ▼ かぢとり、舟歌をうたひて、何とも思へらず。
船乗りや船頭は舟唄を歌い、何とも思っていない。
- ▼ 竜の首の玉取り得ずは、帰り来な。
竜の首の玉を取ることができなければ、帰ってくるな。
- ▼ 秋来ぬと目にはさやかに見えねども風の音にぞおどろかれぬる (||はつと気づいたことだよ)
(立秋の日になっても)秋が来たと、はつきりと目にはみえないけれど、風の音で(秋の到来に)はつと気づいたことだよ。
- ▼ 思はむ子を法師になしたらむこそ心ぐるしけれ。
(かわいいと)思うような子を法師にするようなことは、本当に心苦しいことだなあ。
- ▼ 「義仲は討死をせんずるなり」(義仲自身のことば)
義仲は討ち死にするつもりである。
- ▼ いつはりのなき世なりせばいかばかり人の心のうれしからまし
偽りのない世界になったならば、どれほど人の心がうれしいだろうか
- ▼ 「あが仏(||娘よ)、何事を思ひたまふぞ。思すらむこと何事ぞ」(翁からかぐや姫へのことば)
娘よ、何をお思になるのか。お思いいになっていることは何か。
- ▼ 「…翁(||私の)申さむこと聞き給ひてむや」(同右)

私の申すようなことをお聞きになってくれないか。

▽ 白露の色はひとつを（Ⅱなのに）いかにして秋の木の葉をちぢに（Ⅱいろんな色に）染むらむ白露の色は一つなのにどのようにして秋の木の葉を様々に染めるのだろう。

▽ これになにを書かまし。

▽ これに何を書こうかしら。

▽ われ、いかでか（Ⅱどうにかして）七月・八月に死にせじ。

私はどうにかして7・8月に死ぬつもりだ。

▽ かぐや姫、この皮ぎぬを見て、いはく、「うるはしき皮なめり。…」

かぐや姫は、この皮衣を見て、言うには、「美しい皮であるようだ。…」

▽ 羽なければ、空をも飛ぶべからず。

▽ 羽がなければ、空も飛ぶことができない。

▽ 「論争する大納言、中納言を見て」近習の女房ども、「興あるあらがひ（Ⅱ争い）なり。同じくは、

「陛下の」御前にて争はるべし。…」

近習の女房たちは、「面白い争いである。もし同じことをするならば陛下の御前にて争う方がよい。…」

練習問題 13

次の短文を現代語訳せよ。(助動詞に注意すること。)

- ▽ 人々あまた声して来なり。国守の御子の太郎君のおはするなりけり。
- 人々、数多くの声がしてくるようだ。国守の御子の太郎君がいらっしやるようだなあ。
- ▽ 人はただ無常(＝死)の身に迫りぬることを心にひしとかけてつかの間も忘るまじきなり。
- 人はただ死が身に迫ったことを心にしっかりと留め置いて、少しの間も忘れない方がよいのである。
- ▽ 「物のあはれは秋こそまされ」と人ごとに言うめれど、…
- 「物のあはれは秋がまさっている」と誰もが言うようだけれど、…
- ▽ 「梨の花は」唐土には限りなきものにて、「私は直接は目にしていないが」文(＝漢詩)にも作るなる。
- 梨の花は唐土ではこの上ない花として、監視にも読み込んでいるようである。
- ▽ わが身は女なりとも、敵の手にはかかるまじ。
- 私の体は女であるとしても、敵の手にはかかるまい。
- ▽ むかし、男、わづらひて、心地死ぬべくおぼえければ、…
- 昔、男が病気になって、気持ちが死ぬはずに思われたので、
- ▽ 抜かむとするに、おおかた抜かれず。
- 抜こうとする時に、まったく抜くことができない。

- ▼ 「この幣の散る方に御船速やかに漕がしめ給へ」「神への祈り」
- この幣（ぬさ）の散る方向にお舟を速く漕がせてください。
- ▼ 法皇「人やある、人やある」と召されけれども、おんいらへ申すものもなし。
- 法皇が「人はいるか、人はいるか」とお呼びになるけれども。お返事をするものはいない。
- ▼ いたういたむ（＝迷惑がる）人の、強ひられて少し飲み足るも、いとよし。
- ひどく迷惑がる人が、無理強いされて少し（酒を）のみたすのも、とても良い。
- ▼ けふは都のみぞ思ひやらるる。
- 今日は都だけが、自然と思いだされる。
- ▼ 愚かなる人の目をよろこばしむるたのしみ、またあぢきなし。
- 愚かな人の目を喜ばせる楽しみ、（これも）また無益なものである。
- ▼ かの大納言いづれの船にか乗らるべき。
- あの大納言はどの府にお乗りになるのがよいか。
- ▼ 権門のかたはらに居る者は、深く喜ぶことあれども、大きにたのしむに能はず。
- 権門（けんもん）のそばにいる人は、深く喜ぶことがあるけれども、大いに楽しむことはできない。
- ▼ などかうは泣かせたまふぞ。この花の散るを惜しうおぼえさせたまふか。
- どうしてこのようにお泣きになるのか。この花が散ることを惜しくお思いになるのか。

- ▼ しばしうち休み給へど、寝られ給はず。
- ▼ 少しの間、ちょっとお休みになるけれどご執心することはできない。
- ▼ 吉野なる夏実の川の川淀に鴨ぞなくなる山かげにして
- ▼ 吉野の夏実の川の川淀に鴨が鳴いているようだ。山の陰の向こう側で。
- ▼ この俊寛も僧なれども、心も猛くおごれる人にて、よしなき謀反にも与し（＝関係し）けるにこそ。この俊寛も僧侶であるけれども、心も気が荒く驕り高ぶって、つまらない謀反にも参加したのであろう。
- ▼ 大納言の御むすめ、亡くなり給ひぬなり。
- ▼ 大納言のお嬢さんはお亡くなりになったそうだ。
- ▼ これは竜のしわざにこそありけれ。この吹く風はよき風なり。
- ▼ これはきつと竜の仕業に違いなかった。この吹く風はよい風である。
- ▼ 経盛相伝せられたりし「笛」を、敦盛器量たるによつてもたれたりけるとかや。
- ▼ 経盛（つねもり）送電送電させられていた笛を、敦盛が笛の才覚があったので持たれていたということである。
- ▼ 少しのことにも先達（＝先輩）はあらまほしきことなり。
- ▼ ちょっとしたことであっても先輩はいてほしいことである。

練習問題 (付属語予備)

「A」次の空欄に入る語として最も適当なものを選び、番号で答えよ。

1 もとの国へ帰らんと思ひけれども、「よしなし、さる無仏世界のやうなる所に帰ら
「」。
ここにゐなん」。〈宇治拾遺物語〉

- ①ばや ②ん ③るれ ④じ ⑤まし

1 「 」

2 つとめてより雨降り暮らせば、「月もある」「なめり」と、口惜しうながめ暮らすに、夕さり
つかた風うち吹きて、月、ありしよりも空澄みて、明くなりぬ。〈夜の寢覚〉

- ①べき ②らむ ③べらなる ④まじき ⑤らしき

2 「 」

3 此の里は昔も盗人ありてこそ、「今日はな焼き」「」とともに詠まれけると聞きおきしかど、
〈都のつと〉

- ①し ②ぎ ③つ ④そ ⑤ね

3 「 」

4 「玉の枝取りになむ」「」〈竹取物語〉

- ①まかれ ②まかり ③まから ④まかる

4 〔 〕

5 空しき煙にたぐひても伴ふ道ならばと、思ふも甲斐なき袖の涙ばかりを形見にてぞ、帰り侍り
「 」。〈とはずがたり〉

- ①しか ②き ③つ ④し ⑤ぬ ⑥たり

5 〔 〕

〔B〕 次の問いに答えよ。

6 傍線部から助動詞〈助動詞の一部分であるものを除く〉を三つ選べ。〈落窪物語〉

- ①習はす人あらばいとよくしつべけれど、たれかは教へむ。
②六つ七つばかりにておはしけるに習はし置ひ給ひけるままに
③いとをかしげにひねり縫ひ給ひければ、
④侮りやすくて、いとわびしければ、うち泣きて縫ふままに、
⑤世の中にいかであらじと思へどもかなはぬものは憂き身なりけり
⑥げに、いたはり給ふことめでたければ、

6 〔 〕 〔 〕 〔 〕 〔 〕 〔 〕

7 傍線部の「れ」と同じ意味のものはどれか。

今はむかし、ある大名きはめて良き名馬をもとめて、「我が一大事の先途見るべき物はこの馬なり」として秘蔵せられ、馬の飼料として、米・豆潤沢にあてがはれしに、〈浮世物語〉

①涙のこぼるるに、目も見えず、物も言はれず。

②このあひだに、仕はれむとてつきて来るわ

らはある。

③筆をとれば物書かれ、楽器をとれば音をたてんと思ふ。

④野辺近く家居しせれば

鶯の鳴くなる声は朝な朝な聞く

⑤四条大納言撰ばれたる物を道風書かん事、時代やたがひ侍らん。

7 〔 〕

8 傍線部の「られ」と文法的に同じ働きを示すものはどれか。

そののちいく程なくして、此まけ侍、思ひかけぬ事にてとらへられて人屋に居にけり。〈宇治拾遺

物語〉

①かく経ども集めらると聞き給ひて

②住みなれて故里、限りなく思ひ出でらる

③をとこは

た寝られざりければ

④ありがたきもの。舅にほめらるる婿

8 〔 〕

9 傍線部「ね」と意味的に同じものとして最も適当なものを選び。

「住吉の神の導き給ふままに、はや、舟出して、この浦を去りね」とのたまはす。〈源氏物語〉

①御前にもおほとのごもり、人々みなねぬるのち、
②声もせねば、いぎたなくねたるなめりと
思ひて、
③かの親王よりほかに、また言の葉をかはすべき人こそ世におぼえね。
④ことあたら

しく申すに及ばねど、なほいとめでたきものなり。
⑤これに物ぬぎて取らせざらむ者は座より立ちね。

9 〔 〕

10 傍線部「なる」と文法的意味・用法が同じものを、次の中から選べ。

蠅螂たうろうの駈たうろうくらべといふなる事こそ、興ある事にてあるなれ。〈文机談〉

①十三になる年、上らむとて、九月三日門出して
②心細げなる有様、いかで過ごすらむといと
心苦し
③ただ物をのみ見むとするなるべし
④物語の多く候ふなる、ある限り見せたまへ
⑤天の原ふりさけ見れば春日なる三笠の山に出でし月かも

10 〔 〕

11 傍線部の「らむ」と同じ意味のものはどれか。

ここにも思はしき人の、月日を隔てたまへらむほどを思しやるに、いといみじうあはれに心苦し。

〈源氏物語〉

① 罪や得らむと思ひながら、またうれし。 ② おのづから御目離るるをりも侍りつらむ。
思はむ子を法師になしたらむこそ、心苦しけれ。 ④ 生けらむほどは武に誇らず。

1 2 傍線部「に」と同じ用法のものを二つ選びなさい。

やがて仁和寺なる所に籠りぬにけり。〈十訓抄〉

- ① 冬ながら空より花の散りくるは雲のあなたは春にやあるらむ
- ② 帰りける人来れりと聞きしかばほとほとしにき君かと思ひて
- ③ 何時しかと待つらむ妹に玉づさの言だに告げず往にし君かも
- ④ 唐衣着つつなれにし妻しあればはるばる来ぬる旅をしぞ思ふ
- ⑤ 名にめでて折れるばかりぞ女郎花われ落ちにきと人にかたるな

1 1
〱
〱

1 2
〱
〱
〱

1 3 傍線部の「む」と同じ意味のものはどれか。

心おそく詠み出だす人は、すみやかに詠まむとするもかなはず。〈俊頼髓脳〉

① 忍びてはまゐりたまひなむや ② をかしからむ所のあきたらむもがな

③ かならず尋ねと

ぶらはむ ④ 思はむ子を法師になしたらむこそ、心苦しけれ

1 3 〔 〕

1 4 傍線部「ぬ」と同じ意味・用法のものを一つ選べ。

契りといふものは、目に見えぬわざなれば、さりともしまあはれと思しいでなむ。〈木幡の時雨〉

① 人知れぬ御袖のしづくせきかねて ② 明けぬれば、起きいで給ひて ③ いまは参りつき給ひ

ぬと ④ いひおくこともなくて止みぬるものにこそ ⑤ 御枕もうきぬばかりなれば

1 4 〔 〕

1 5 傍線部「な」と文法的に同じものをすべて選べ。

なほ聞こえしやうに、法師にやなりなまし。〈栄花物語〉

①あなゆゆし。かかることなたまひそ。

②ただ今はただ夢を見たらんやうにのみおぼされて、過ぐしたまふ。

③起き臥しの契りは絶えてつきせねば枕を浮くる涙なりけり

④みな焼けにし後、去年今年のほどこにしませさせたまへるもいみじう多かりし、

⑤里に出でなば、とり出でつつ見て慰めむとおぼされけり。

1 5 〔 〕

1 6 傍線部「の」と同じ用法のものはどれか。

非参議の四位どもの、世のおぼえ口惜しからず、もとの根ざしいやしからぬ、やすらかに身をもてなしふるまひたる、いとかはらかなりや。〈源氏物語〉

①雪の降りたるは言ふべきにあらず ②香をかげば昔の人の袖の香ぞする ③まことにかば

かりのは見えざりつ ④若き女のいと清げなる出で来たり ⑤日の暮るるほど、例の集まりぬ

1 6 〔 〕

17 傍線部の「より」と同じ意味に用いられているものはどれか。

朔日の日夕さりぞ参りつきて、陣入るるより昔おもひいでられて、かきぞくらさるる。〈讃岐典侍日記〉

- ①吾よりも貧しき人の父母は飢ゑ寒からむ ②海づらよりは少し入りたる国分寺といふ寺を
③ひと夫の馬より行くに、己夫しかちより行けば、見るごとにねのみし泣かゆ ④前より行く水を
ば、初瀬川といふなりけり ⑤また時の間の煙ともなりなむとぞ、うち見るより思はるる

17 〔 〕

18 傍線部「にて」と同じ意味で用いられているものを選べ。

冬のことにて、しもがれの薄すすほのぼの見えわたりて、をりふし物がなしうおぼえ侍りければ〈新古今和歌集〉

- ①なんでふ心地すれば、かく物思ひたるさまにて月を見給ふぞ ②月の都の人にて、父母あり
③帰る道にてくらのちの皇子血の流るるまで調ぜさせ給ふ ④わが朝ごと夕ごとに見る竹の中にお
はするにて知りぬ

18 〔 〕

19 傍線部「ば」と異なる用法の「ば」を一つ選べ。

「木にこれ結びつけて持てまゐれ」と言はせたまひしかば、あるやうこそはとて、持てまゐりてさぶらひしを、〈大鏡〉

- ①うぐひすの宿はと問はばいかが答へむ ②「きむぢ求めよ」とのたまひしかば、一京まかり歩ひときやうきしかども、 ③清涼殿の御前の梅の木の枯れたりしかば、求めさせたまひしに、 ④勅なればいともかしこし

20 傍線部「とも」の意味用法に最も近いものを選べ。

- この人のけしき、いまは逃ぐとも、よも逃がさじとおぼえければ、〈宇治拾遺物語〉
- ①御門の召しての給はんこと、かしこしとも思はずといひて、 ②もし海辺にて詠ままししかば、波たちさへて入れずもあらなむとも詠みてましや。 ③遊女三人、いづくよりともなく出で来たり。 ④かくさしこめてありとも、かの国の人こば、みなあきなんとす。 ⑤これかれ酒なにともて追ひきて、磯におりみて別れがたきことをいふ。

19 〔 〕

20 〔 〕

2 1 傍線部「ながら」と同じ用法のものを一つ選びなさい。

西の陣より殿上の畳ながらかき出でて出でぬれば、人々も見ずなりぬ。〈宇治拾遺物語〉

①冬ながら空より花の散りくるは雲のあなたは春にやあるらむ ②身はいやしなながら、母なむ宮なりける。 ③しづ心なく面影に恋しければ、あやしの心やと、われながらおぼさる。 ④露ながら折りてかざさむ菊の花老いせぬ秋の久しかるべく

2 2 傍線部「で」と同じ用法のものを一つ選べ。

聞きにくくもあらで、いとかしこく聞こゆ。〈源氏物語〉

①誰もみなあのやうでこそありたけれ ②奏聞しけれども、御遊の折節で聞こし召しも入れられず ③ものあはれも知らで、おのれし酒をくらひつれば ④ひとへに女房のさまでぞましましける

2 1
〔 〕

2 2
〔 〕

2 3 傍線部の「だに」と同じ意味に用いられているものはどれか。

かかるよき人だに、さるふるまひのあんなれば、なにかはくるしからんとやうに思ふ心こそつきもすべけれ。〈源氏物語玉の小櫛〉

①忘れ貝拾ひしもせじ白珠を恋ふるをだにも形見と思はん ②花の色は霞にこめて見せずとも香をだに盗め春の山風 ③吹く風を鳴きて恨みよ鶯は我やは花に手だにふれたる ④恋ひ恋ひて逢へる時だにうつくしき言つくしてよ長く思はば

2 3
〔 〕

2 4 傍線部の「ばかり」と同じ意味に用いられているものはどれか。

今宵ばかりの出で立ち、ものさはがしくて、かくとだに聞こえあへず、〈十六夜日記〉

①夕顔といふ名ばかりをかしきはなし ②ひなの長き住まひは今年ばかりにて ③庵なども浮きぬばかりに雨降りなどすれば ④子の刻ばかりに舞姫の家より火出で来て ⑤与一、そのころはいまだ二十ばかりにて

2 4
〔 〕

2 5 傍線部「し」と同じ意味を持つものを一つ選べ。

名にしおふ花の白川わたるには〈今物語〉

- ①春がすみかすみていにし雁がねは今ぞ鳴くなる秋霧の上に
②ほのぼのと明石の浦の朝霧に
島隠れ行く船をしぞ思ふ
③昨日こそ早苗とりしかいつの間に稲葉そよぎて秋風の吹く
④わが
庵は都のたつみしかぞ住む世をうぢ山と人はいふなり
⑤白露の色はひとつをいかにして秋の木の
葉をちぢに染むらん

2 5
〔 〕

2 6 傍線部「こそ」と同じ意味用法のものを次の中から一つ選べ。

声だかに人よぶ声のしければ、「何事ぞ」ときけば、「地藏こそ」と、高くこの家の前にていふな
れば、〈宇治拾遺物語〉

- ①もろこしが原に、やまとなでしこしも咲きけむこそ。
②とびのゐたらんは、何かは苦しかるべき。この殿のみ心、さばかりにこそ。
③中垣こそあれ、ひとつ家のやうなれば、
④「北殿こそ、聞き給ふや」など言ひかはすも聞こゆ。

2 6
〔 〕

27 傍線部の「なん」と同じ意味に用いられているものはどれか。

なき名さへ早くながるる吉野川岩うつ波のいはでやまなん〈吉野拾遺〉

- ① 寄する波うちも寄せなんわが恋ふる人忘れ貝おりて拾はん ② 龍田川紅葉乱れて流るめり渡らば錦なかや絶えなん ③ 夜昼御前にさぶらひて、わづかになんはかなきふみなども習ひはべりし ④ 願はくは花のもとにて春死なんそのきさらぎの望月のころ

27 〔 〕

28 傍線部「ばや」と同じ用法のものを一つ選びなさい。

御心のうちにぞ、いとあさましく、かへすがへす、とりかへばやと思されける。〈とりかへばや物語〉

- ① 心あてに折らばや折らむ初霜の置きまどはせる白菊の花 ② 夕されば蛍よりけに燃ゆれどもひかり見ねばや人のつれなき ③ 梅の花誰が袖ふれしにほひぞと春や昔の月に問はばや ④ 思ひつつ寝ればや人の見えつらむ夢と知りせば覚めざらましを ⑤ なれゆくはうき世なればや須磨の海人の塩焼き衣まどほなるらん

28 〔 〕

〔C〕 次の傍線部の文法上の意味として最も適当なものを選び、番号で答えよ。

2 9 扇をはらはらと使ひ鳴らして聞き知らせければ、〈今物語〉

- ① 打消 ② 強意 ③ 自発 ④ 推量 ⑤ 可能 ⑥ 使役 ⑦ 断定 ⑧ 尊敬

2 9 〔 〕

3 0 松殿の思はせ給ひける女房、離れ離れになり給ひてのち、〈今物語〉

- ① 断定 ② 推量 ③ 打消 ④ 尊敬 ⑤ 使役 ⑥ 強意 ⑦ 可能 ⑧ 自発

3 0 〔 〕

3 1 我ながらあらぬかとのみたどりわび、〈今物語〉

- ① 使役 ② 可能 ③ 強意 ④ 推量 ⑤ 自発 ⑥ 断定 ⑦ 尊敬 ⑧ 打消

3 1 〔 〕

3 2 身ながらも、なかなかうとましかりぬべければ、〈今物語〉

- ① 断定 ② 強意 ③ 自発 ④ 使役 ⑤ 可能 ⑥ 推量 ⑦ 打消 ⑧ 尊敬

3 2 〔 〕

3 3 わろ歌とも申しつべき歌なるを、おなじ程の歌と、さだめられたり。〈俊頼髓脳〉

- ①断定
- ②当然
- ③比況
- ④完了
- ⑤反実仮想
- ⑥打消推量
- ⑦可能
- ⑧伝聞
- ⑨強意
- ⑩過去

3 4 さりとて、やはとて、人まねに申すなめり。〈俊頼髓脳〉

- ①反実仮想
- ②強意
- ③完了
- ④伝聞
- ⑤比況
- ⑥当然
- ⑦過去
- ⑧可能
- ⑨

断定 ⑩打消推量

3 5 人よりはよく知れり、人よりはよく詠めるぞ、と思へる。〈俊頼髓脳〉

- ①比況
- ②完了
- ③可能
- ④反実仮想
- ⑤当然
- ⑥強意
- ⑦断定
- ⑧伝聞
- ⑨

過去 ⑩打消推量

3 6 いとどあかぬ所なく光り添ひたまふぞ、げに見るかひあめる。〈うたたね草紙〉

- ①推定
- ②断定
- ③伝聞
- ④完了
- ⑤自発

3 6 〱

3 5 〱

3 4 〱

3 3 〱

〔D〕傍線部と文法的に最も近いものを選べ。

3 7 大衆を催もよほしてうちとどめ、「別当をも払ふべし」などまでののしりて、「この事によりて、いかなる重科ぢゆうくわにも行はるれば、我が身張本ちやうぼんに出づべし」とぞいひける。〈沙石集〉

①頼朝が首をはねて、わが墓の前にかくべし。 ②毎度ただ得失なく、この一矢に定むべしと思へ。

③ゆく蛍雲の上までいぬべくは秋風吹くと雁かりに告げこせ ④潮満ちぬ、風も吹きぬべし。 ⑤ほととぎす鳴くべき時に近づきにけり。

3 7 〔 〕

3 8 大衆を催もよほしてうちとどめ、「別当をも払ふべし」などまでののしりて、「この事によりて、いかなる重科ぢゆうくわにも行はるれば、我が身張本ちやうぼんに出づべし」とぞいひける。〈沙石集〉

①ゆく蛍雲の上までいぬべくは秋風吹くと雁かりに告げこせ ②潮満ちぬ、風も吹きぬべし。 ③ほととぎす鳴くべき時に近づきにけり。 ④毎度ただ得失なく、この一矢に定むべしと思へ。 ⑤

3 8 〔 〕

頼朝が首をはねて、わが墓の前にかくべし。

〔E〕傍線部の品詞の説明として適切なものを選べ。

3 9 豊前の大君といふ人ありけり。〈宇治拾遺物語〉

- ①格助詞
- ②副助詞
- ③終助詞
- ④接続助詞
- ⑤係助詞

4 0 その国の守にぞなさるらん。〈宇治拾遺物語〉

- ①接続助詞
- ②格助詞
- ③終助詞
- ④係助詞
- ⑤副助詞

4 1 「かくなるべし」と言ふ人のならで、不慮に、〈宇治拾遺物語〉

- ①接続助詞
- ②終助詞
- ③副助詞
- ④格助詞
- ⑤係助詞

4 1

∧

∨

4 0

∧

∨

3 9

∧

∨

〔F〕次の問いについて該当するものを選び、番号で答えよ。

4 2 次のうち「して」が手段・方法を表すもの一つ選べ。

- ①してそれは、どのやうなものぞ〈今源氏六十帖〉 ②三十あまりにして、更にわが心と一つの庵を結ぶ〈方丈記〉 ③松の炭して岩に書き付け侍りと、いつぞや聞えたまふ〈奥の細道〉 ④これやこの大和にしては我が恋ふる紀路にありといふ名に負ふ背の山〈万葉集〉 ⑤夜長うしてねぶることなければ〈蜻蛉日記〉

4 2 〔 〕

4 3 傍線部の助詞「に」の中で一つだけ種類の異なるものを選べ。〈太平記〉

- ①まことの色を見てだにも世は皆夢の中のうつつとこそ思ひ捨つることなるに、こはそも何事のあだし心ぞや。 ②せめて御心をやる方もやと、御車に召されて、賀茂の糺の宮へ詣でさせ給ひ、 ③年久しく住み荒したる宿のものさびしげなるに、撥音気高く、青海波をぞ調べたる。 ④洞院の左大将の出だされたりける絵に、源氏の優婆塞の宮の御娘、少し真木柱に居隠れて琵琶を調べ給ひしに、 ⑤一村雨の過ぐるほどの笠宿りに立ち寄るべき心地にもおぼしめさず。

4 3 〔 〕

4 4 他の四つの「て」と品詞が異なるもの一つ選べ。〈今昔物語集〉

- ①本の妻はその国の人にてなむありける。 ②男、これを聞きていみじくあはれと思ひて、
 ③それが妻を二人持ちて、家を並べてなむ住ませける。 ④今の妻の志失せにければ京に送りてけり。
 ⑤本の妻心うしと思ひてぞ過ぐしける。

4 4
 〔 〕

〔G〕傍線部の文法上の意味は何か。最も適当なものを一つずつ選べ。

4 5 いづれの所に、いかなる苦を受けてか嘆く^aらむと、悲しく覚えて、彼女の後世をとぶらひ侍らむと思ひて、田などの侍りしをもみなふり捨てて、かくまかりなりし後には、念仏すべて怠りなく侍り。(中略)こまごまと後の世をとぶらふ情けをかけざるに、この僧の思ひ入れて勤め^cけむ、げにありがたく覚えて侍り。〈撰集抄〉

- ①推量 ②意志 ③適當 ④仮定 ⑤現在推量
 ⑥原因推量 ⑦過去推量 ⑧過去の伝聞・婉曲

4 5
 〔 a 〕 〔 b 〕 〔 c 〕

〔H〕傍線部と文法上の意味が最も近いものをそれぞれ選べ。

4 6 なほ参らせて候は^aせんと定めて、二十七といふ春、初めて参る。

一日ばかり籠りみたりしほどに、御持仏堂へ出で^bさせおはしまして、召ししかば、参りぬ。
〈たまきはる〉

①世の中にたえて桜のなかりせば春の心はのどけからまし

②「我に恥見すること。いかでこれが報いせん」と思ひなりて、

③白河院おりみさせ給ひてのち、金葉集かさねて俊頼朝臣に仰せて撰ばせ給ふにこそ、初め奏したりけるに、

④宮はいとやすらかに、いま少し大人びさせ給へる御けしきの、紅の御衣にひかりあはせ給へる、たぐひはいかでかと思えさせ給ふ。

⑤「いたく暮れ侍りぬ」と申せば、ながめさして立ち給ふに、雁鳴きて渡る。

4 6 〔 a 〕 〔 b 〕

〔I〕傍線部の説明として最も適当なものを選べ。

4 7 「あはれ、紅葉を焼かん人もがな」、〈徒然草〉

①強意の係助詞

②意志の助動詞

③詠嘆の助動詞

④願望の終助詞

⑤願望の助動詞

4 7 〔 〕 〔 〕

5	6	(1	(1
((①	(((
a	①	(((④
⑤	(2	①	1	(
b	3	8	(1	(
②	7	(2	(2
((③	0	④	(
c	((((④
⑧	①	((1	(
((2	④	2	(
(3	9	(1	3
4	8	(2	((
6	(⑥	1	④	(
(④	((⑤	④
a	(3	④	((
③	3	0	(1	4
b	9	((3	(
④	(④	2	(④
(①	(2	③	(
((((((
4	3	(③	1	5
7	4	1	(4	(
(④	(((④
(④	⑧	2	①	(
((3	3	(6
(3	((1	(
4	2	②	③	5	(
1	((((②
(②	((④	③
(①	2	④	⑤	⑤
((4	(((
4	3	((7	(
2	3	②	1	((
(((6	(⑤
③	⑨	((④	(
((2	(((
(5	((((
4	3	(1	8	(
3	4	(②	7	(
((⑨	((④
(①	((⑤	(
((2	⑥	(9
4	4	(④	1	(
((②	(8	⑤
④	(((((
4	3	2	(④	1
4	3	7	(0	0

解答

練習問題 14

- ▼ (翁) おきな 「ここにおはするかぐや姫は、重き病をしたまへば、え出いでおはしますまじ」 (竹取物語)
- ▼ 「ここにいらっしゃるかぐや姫は、重い病気をなさっているので、出ていらっしゃることはできないだろう」
- ▼ 年ごとの桜の花盛りには、(惟喬 親王これたかの みこハ) その宮へなむおはしましける。 (伊勢物語・八二)
- ▼ 毎年の桜の花盛りには、(惟喬親王は) その宮へおいでになったた。
- ▼ (惟喬 親王これたかの みこガ馬 頭うまの かみニ) 大御酒たまひ、禄ろくたまはむとて、つかはさざりけり。 (伊勢物語・八三)
- ▼ (惟喬親王が馬頭に) お酒をお与えになり、褒美をくださるうとして、お帰しにならなかつた。
- ▼ 「これに習はせ」と北の方のたまへば、時々教ふ。(落窪物語)
- ▼ 「これに習わせよ」と北の方がおっしゃるので、時々教える。
- ▼ (大 君おほい きみハ) 心地もまことに苦しければ、物もつゆばかりまゐらず、(源氏物語・総角あげまき)
- ▼ (大君は) 気分も本当に苦しいので、食べ物もほんの少しばかりもめ仕上がらず、
- ▼ (院ガ) 世をしろしめす事は今もかはらねば、いとめでたし。(増鏡)

- ▼ (院が) 世をお治めになることは今も変わらないので、たいそう喜ばしい。
- ▼ 翁答へて申す、「かぐや姫を養ひたてまつること二十余年になりぬ」(竹取物語)
- ▼ (竹取の) 翁が答えて申し上げることは、「かぐや姫を育て申し上げることは二十余年になった」
- ▼ (生昌ガ) なりまさ 「(中宮様ニ) これまゐらせたまへ」とて、御硯おんすずりなどさし入る。(枕草子・六)
- ▼ (生昌が) 「(中宮様に) これをさしあげてください」と言つて、御硯などをさし入れる。
- ▼ 身を捨てて額ぬかをつき(仏ニ) 祈り申すほどに、(更級日記)
- ▼ 身を投げ出して額をすりつけて(仏に) 祈り申し上げるうちに、
- ▼ (中宮ノ) 御前おまへに参りて、ありつるやう啓すれば、(枕草子・六)
- ▼ (中宮様の) 御前に参上して、さっきのありさまを申し上げますと、

練習問題 15 (敬語総合)

〔A〕次の傍線部の訳を「 」に合うように補って、現代語訳を完成せよ。

1 「(私ハ) 今ぞ心やすく黄泉路よみぢもまかるべき」 (大鏡・序)

(訳) 「(私は) 今こそ安心して黄泉みちへの路 (||あの世への道) も「 」」

1

2 「かの白く咲けるをなむ、夕顔ゆふがおと申しはべる」 (源氏物語・夕顔)

(訳) 「あの白く咲いているのを、夕顔と「 」」

2

3 「(私ガ) 太政だいじやう 大臣だいじん殿殿にて元服つかまつりし時、」 (大鏡・序)

(訳) 「(私が) 太政大臣の御殿で元服「 」た時、」

3

4 「これをなん、身にとりてはおもて歌と思ひ給ふる」 (無名抄)

(訳) 「これを、自分にとっては代表歌と思っ「 」」

4

5 (源氏ハ) のたまひさして、若君を見たてまつりたまふ。 (源氏物語・柏木)

(訳) (源氏は) おっしゃるのを途中でやめて、若君を見〔 〕。

5 〔 〕

6 上も聞うこしめし、めでさせたまふ。(枕草子・二二)

(訳) 天皇もお聞きになり、〔 〕。

6 〔 〕

7 (帝) 「この女、もし(私二)奉りたるものならば、翁おきなに冠かうぶりをなどか賜はせざらむ」(竹取物語)

(訳) (帝) 「この女を、もし(私に)差し上げたものならば、翁に位階をどうして〔 〕

7 〔 〕

8 御心をたがひに慰めたまふほどに、三年ばかりありて、(竹取物語)

(訳) お心を互いに慰め合い〔 〕うちに、三年ほど経って、

8 〔 〕

9 いと暑しや。これより薄おんぞき御衣奉れ。(源氏物語・蜻蛉かげろふ)

(訳) たいそう暑いことよ。これより薄いお着物を〔 〕。

9 〔 〕

10 簾すだれ少し上げて、花奉るめり。(源氏物語・若紫)

(訳) 簾を少し上げて、花を「」ようだ。

1 0 「

1 1 「もの恐ろしき夜のさまなめるを、宿直人^{とらみちび}にてはべらむ(源氏物語・若紫)

(訳) 「何となく不気味な夜の様子であるようだから、宿直人として「」よう」

1 1 「

1 2 誰^{たれ}ならむと思ふほどに、故宮にさぶらひし小舎人童^{こどねり}なりけり。(和泉式部日記)

(訳) 誰^{たれ}だろうと思うと、亡き宮に「」ていた小舎人童^{こどねり}だった。

1 2 「

[B] (訳) を参考にして、傍線部の敬語は誰から誰への敬意を示しているか答えよ。

1 3 (中宮ノ所ニ) 大納言殿のまゐりたまへるなりけり。(枕草子・一七七)

(訳) (中宮様の所に) 大納言殿が参上「」たのだった。

1 3 「

1 4 殿^{との}、(中納言隆家ニ) 「とく御紐^{ひもと}解かせたまへ」(大鏡・道隆)

(訳) 殿は、(中納言隆家に) 「早くお紐を「」解き「」

解答

- 1 「参ることができません」 2 「申します」 3 「いたしまし」 4 「ております」 5 「申し上げなさる」 6
「お褒めになる」 7 「お与えにならないだろうか、いやお与えになろう」 8 「なさる」 9 「お召しになりなさい」 10
「差し上げる」 11 「お控えし」 12 「お仕えし」 13 「作者から、大納言への敬意」 14 「殿から、中納言隆家への敬
意」

14

「

」